

保育者養成校のピアノ初心者に対する指導法の提案

——バイエル No.48 を事例として——

南 谷 悠 子

摘要：本研究は、保育者養成校のピアノ初心者に対する指導法を考察するものである。バイエル 48 番においてつまづきがみられる学生 2 名を対象とし、付点のリズムを演奏できるようにするために、筆者が「右手を弾く＋左手はピアノを弾かずにリズムをひざ打ちする」という練習方法を提案した。音価を頭で理解するだけではなく、身体で体感する試みである。練習方法の実践後の演奏聴取において、学生 2 名ともがバイエル 48 番を楽譜通りの正しいリズムで弾くことができるようになった。筆者が提案した練習方法は、3 拍子の中に付点のリズムを自然に演奏できるようにするという点において、一定の効果があったと考えられた。また、バイエル 48 番における学びとその拡がりについても考察を行った。ピアノ初心者に対する指導において、机上の学習（理論）とピアノの学習（実践）のつながりにくさが問題に挙げられる。ピアノの前に座ってからもソルフェージュ的練習を行い、演奏につなげていくことが必要である。そして、学生一人ひとりの学習状況の把握を手がかりとした授業計画が大切である。

キーワード：保育者養成 ピアノ初心者 バイエル 48 番 付点音符 リズム

I. 研究の背景

本学子ども学科では、1 年次の「音楽基礎」において、「標準バイエルピアノ教則本」¹⁾をテキストとして使用している。「バイエル」の養成校での使用状況について、柏瀬ら（1986）の調査によると、バイエル系テキストの使用率は 92%であり²⁾、宮脇（2001）の調査によるとバイエルの使用率は 54%であった³⁾。小倉（2013）の調査（関東近県の養成校が対象）によると 72%⁴⁾、辻ら（2017）の調査（シラバスに基づいた調査）によると 59.1%と報告されている⁵⁾。「バイエルピアノ教則本（以下、バイエル）」は様々な問題点が挙げられつつも、いまだ根強く使用されて

いるといえるだろう。井上（2013）は、バイエルの問題点のひとつとして、曲の構成がワンパターン（右手がメロディーで左手は主要三和音による伴奏、という組み合わせばかり）でつまらないと指摘している⁶⁾。しかし、ピアノ初心者が子どものうたの弾き歌いをするときのある種「型」ともいえるのが、右手がメロディーで左手は主要三和音による伴奏であると考えられる。また、バイエルについて、安田（2016）は、「その秘密は『静かにした手』にある」と述べている⁷⁾。子どものうたがホモフォニーの音楽であることが多いことから、左手を和音でとらえ、移動の少ない「静かにした手」で弾くことが大切であるといえるだろう。「音楽基礎」の学修目標は、「音楽を基礎的に理解するための楽典及びソルフェージュを学修し読譜力をつけ、ピアノ奏法技術を習得する」である⁸⁾。学生は、限られた時間の中で音楽基礎力を習得する必要があるとあり、前述した基本的な「型」を習得する目的から、本学科においては「バイエル」を使用している。

バイエルの楽曲分析はいくつかみられるが、特定の楽曲を取り上げて論じているものは少ない。黒田（2018）は、104 番について実践報告を行っている⁹⁾。そして阪田（2018）は、98 番において、付点のリズムにことばをつけて理解しやすくする方法を提案している¹⁰⁾。しかし、バイエルを事例とした練習法の検証は少ない。

バイエル 48 番においては、付点のリズムについての学びが鍵となる。そして、子どものうたの中でも、日々の生活のうたにおいて付点のリズムは多くみられる。付点のリズムについて、大石ら（2018）は、学生が実習園で弾く機会の多い園の生活のうたについて、「バイエルでまだその付点のリズムの課題のところまで学習が到達していないにもかかわらず、弾かないといけない状況になるので、とにかく早い段階でこの付点のリズムをマスターする必要があるといえる」と指摘している。そして、ソルフェージュのクラス授業において、リズム、特に生活のうたによく出てくる付点 8 分音符と 16 分音符に着目し、リズム強化を試みている¹¹⁾。

II. バイエル 48 番と研究目的

1. 楽曲について

バイエル 48 番の冒頭 8 小節を示す（図 1）。

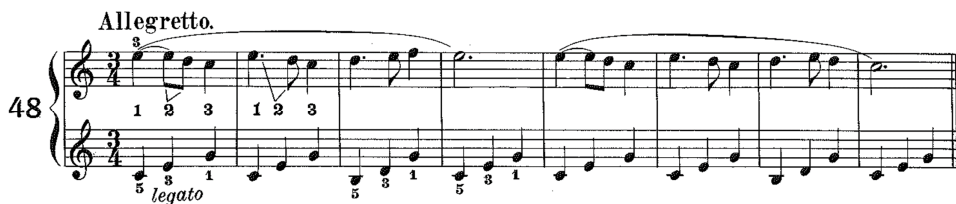


図 1 バイエル No. 48 出典：『標準バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社 p. 37

ハ長調、4分の3拍子、Allegretto、二部形式である。右手の1拍目で付点4分音符（バイエルにおいて初めて出てくる音符）があり、2拍目裏拍で右手の8分音符を入れる。右手は基本のポジション（ドレミファソの鍵盤の上に手を置く）で弾くことができ、4小節ごとにスラーがかかっている。左手の和音はⅠ度（ドミソ）とⅤ度（シレソ）の分散和音である。なお、1小節目と5小節目は4分音符と8分音符がタイとなっており、2小節目以降と6小節目以降は付点4分音符で記譜されている。1小節目と5小節目は拍がわかりやすいように、2拍目の拍頭が理解しやすいように書かれていると考えられる。また、1 2 3 と拍子のカウントが書かれている。

ポイントは3拍子であることと、付点音符を理解することである。楽譜通りに弾くことはできているが、縦の意識や、ここで右手と左手を合わせようという意識が強すぎ、流れがよくない演奏の学生に対しては、学生の演奏に合わせて筆者が円を描くような手拍子（1拍目のみ手拍子）をすることによって、拍は感じながらも1小節が1拍のような流れのある音楽的な3拍子を感じながら演奏できるように試みている。

次に、付点4分音符の理解が弱い学生に対しての指導法を述べる。まずは4分音符+8分音符の長さが付点4分音符の長さであること（音価の理解）の確認を行う。右手のみ1小節目のパターンでタイを取って3小節目まで弾いてもらい（筆者が拍に合わせて手拍子）、8分音符にリズムを分割して考えさせてみることで理解を深めるように試みている。その弾き方に慣れてきたら、1小節目のようにタイをつけて演奏させ（筆者が拍に合わせて手拍子）、付点4分音符への理解を深めるようにしている。そして、1小節目は拍頭が分かりやすく書かれており、1小節目と2~3小節目が同じリズムであることも伝えるようにしている。このような指導法で、多くの学生は演奏ができている。

2. バイエル 48 番につまずく学生

「バイエル 48 番につまずく学生の演奏時に見受けられること」を以下に記す。

- ① 右手のリズムに左手が引っ張られ、両手とも右手のリズムを弾いてしまう。
- ② 左手のリズムに右手が引っ張られ、両手とも左手のリズムを弾いてしまう。
- ③ 拍子の理解不足。拍節感が感じられず3拍子でなくなる。2拍目の間延びにより4拍子になってしまう。
- ④ 2拍目の右手で弾くレのタイミングがあやふやである。
- ⑤ 右手で1拍目に弾いた音（ミ）を2拍目で聴いていられない。
- ⑥ ソルフエージュの学び（楽典..音符と休符の種類や長さについて、リズム打ち..片手及び両手による）をピアノ演奏に活かすことができない。学習がつかない。

このように、毎年ごく少数ではあるが、バイエル 48 番につまずく学生がいる現状にある。2拍目の右手の8分音符を弾くとき、左手の音は弾かず音伸びている状態である。左手と右手を同時に弾くのではなく、左手と右手がずれて弾くことになるため、問題が生じていると考えられる。

3. 学生 A について

入学時点においてピアノは未経験であり、ピアノ以外で音楽活動の経験は特にない。前期の「音楽基礎Ⅰ」において、バイエルは 29 番よりスタートし、29 番→30 番→31 番→45 番を合格している。後期の「音楽基礎Ⅱ」において、バイエルは 47 番よりスタートし、48 番が課題となっている。子どものうたの弾き歌いについては、弾き歌いに入る前段階の「こいぬのマーチ」に取り組んでいる。「こいぬのマーチ」のハ長調とヘ長調を合格し、ト長調が課題となっている。

学生 A のバイエル 48 番演奏時に気づいた点を以下に記す。

- ・Ⅱ-2. 「バイエル 48 番につまずく学生の演奏時に見受けられること」の③④⑤⑥に該当している (3 ページ参照)。
- ・Ⅱ-2. 「バイエル 48 番につまずく学生の演奏時に見受けられること」の⑤について (3 ページ参照)、次のように見受けられる。弾く瞬間 (打鍵) に意識がいきすぎる⇒その音を弾いたら次の音に注意がいく⇒弾いた音を伸ばす (聴いている) ことまで意識がいかない。
- ・左手のみだと (筆者が拍に合わせて手拍子)、弾ける。
- ・右手のみだと (筆者が拍に合わせて手拍子)、うまくいかない。
- ・力が入りがちである。

3 拍子でなく、4 拍子になりがちである。付点 4 分音符+8 分音符の箇所では左手と右手がずれることは理解しているようである。

4. 学生 B について

入学時点においてピアノは未経験であり、ピアノ以外で音楽活動の経験は特にない。前期の「音楽基礎Ⅰ」において、バイエルは 29 番よりスタートし、29 番→30 番→31 番→45 番を合格している。後期の「音楽基礎Ⅱ」において、バイエルは 47 番よりスタートし、48 番が課題となっている。なお、子どものうたの弾き歌いについては、生活のうたである「おはよう (簡易伴奏)」を合格しており、「おかえりのうた (簡易伴奏)」が課題となっている。

学生 B のバイエル 48 番演奏時に気づいた点を以下に記す。

- ・Ⅱ-2. 「バイエル 48 番につまずく学生の演奏時に見受けられること」の①②⑥に該当している (3 ページ参照)。
- ・V 度 (シレソ) の和音が取れていない。
- ・片手ずつは弾けるが (筆者が拍にあわせて手拍子)、両手になるとうまくいかない。
- ・右手のリズムに左手が引っ張られ、両手とも右手のリズムを弾いてしまっている。また、3 小節目や 7 小節目、楽曲後半では左右のリズムがひっくり返り、左手のリズムに右手が引っ張られ、右手のリズムは全て 4 分音符になってしまっている。

- ・フレーズとフレーズがつながってしまう（8小節目と9小節目）。

3拍子になっているが、付点4分音符+8分音符の箇所、両手が同じリズムになってしまい、左手と右手のズレへの理解ができていないようである。

学生Bが、筆者の前で初めて演奏したバイエル48番を楽譜にした（図2）。弾き直して音が合っているかの確認がみられたが、弾き直して音の確認をしたのちの音を採譜している。



図2 学生Bが演奏したバイエル48番

楽譜作成ソフトウェア「Finale2014」を用いて筆者が作成

5. 研究目的

学生Aと学生Bが演奏するバイエル48番において、聞こえてくる音楽としては違うものがあったが、問題は2拍目の左手と右手のズレ（右手の8分音符を弾くとき、左手の音を弾かない）にあると考えられた。そこで、本研究においては、バイエル48番において付点のリズムを演奏できるようにするために、筆者が練習方法を提案し、3拍子の中に付点のリズムを自然に演奏できるようにするという点において、有用性が見られるかを検証することを目的とした。そして、バイエル48番における学びとその拡がりについても考察した。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象と調査時期

対象は、入学時にピアノ未経験者であった学生 A と学生 B である。バイエル 48 番において、まず、3 ページに述べた指導法で付点 4 分音符への理解を試みたが、限られた時間の中では理解が深まらなかった学生 2 名を対象とした。調査時期は、学生 A が 2018 年 10 月下旬、学生 B が 2019 年 10 月中旬である。

2. 倫理的配慮

対象者に、研究の目的や方法、結果の利用、プライバシーの保護について説明した上で、研究協力同意書を提示した。研究協力同意書には、目的と方法、結果の利用に関するプライバシーの保護には十分配慮し、個人情報特定されないことがないようにする旨、明記した。さらに、学生 B については、演奏聴取の様子をビデオで録画し、演奏の分析をする旨、明記した。2 名から研究協力に関する同意書の提出により、研究の同意を得た。

3. 練習方法の提示

学生 A は、拍子の理解不足と付点 4 分音符の 2 拍目（特に右手のレを弾くタイミング）に難しさを感じている。そして、2 拍目の間延びにより 4 拍子になってしまう傾向がある。学生 B は、3 拍子ではあるが、右手のリズムに左手が引っ張られ、両手とも右手のリズムを弾いてしまっている。また、左手のリズムに右手が引っ張られ、両手とも左手のリズムを弾いてしまう箇所がある。2 名とも、何か変だなと思いながら弾いており、混乱している様子も見受けられた。

筆者は、バイエル 48 番において従来の指導法（3 ページ参照）により、付点 4 分音符への理解が深まるように試みた。学生 A は、左手のみはうまくいき、右手のみだとなんとかできているが、両手にするとうまくいかない。やはり、2 拍目のレを弾くタイミングが難しい様子である。学生 B は、片手ではうまくいくが、両手にするとうまくいかない。両手にすると、左手と右手のズレについてと 2 拍目の右手のレを弾くタイミングについてはあやふやなところがある。以上のことから、2 名に共通する問題は 2 拍目の左手と右手のズレにあると考えられた。

そこで、「右手を弾く＋左手はピアノを弾かずリズムをひざ打ちする」という練習方法を提案した。右手と左手が別々のこと（右手は鍵盤に、左手はひざに）を行うのは効果があるのではないかと、との考えからである。また、左手でピアノを弾く（楽譜の音と鍵盤とを一致させる）作業を無くし、左手の 4 分音符のリズムだけにすることで拍の理解につながるのではないかと、そして、手や腕が鍵盤上にあるときよりも、ひざの方が手や腕の位置が下がるため力も抜けるのではないかと、とも考えたからである。学生には、左手は最後の小節以外は全て 4 分音符であることを確認し、左手のリズムは 4 分音符であるため、拍を打つことと同じリズムになることを説明した。その際、左手のひざのリズム打ちはなるべく力を抜いて行うこと、この練習方法を毎日 5 分間行っ

てみるよう伝えた。そして、この練習がスムーズに行えるようになったら、楽譜通りに両手で弾いてみるよう伝えた。なお、学生 B においては、V 度（シレソ）の和音が取れていなかったため、V 度の音の確認を行ってから、和音を手の形で取るようにアドバイスをした。

学生 B については、1 週間後のピアノレッスン時に、バイエル 48 番についてほとんど練習をしてこなかったことが判明した。本人によると、「今週は『おかえりのうた』を集中的に練習してきた」とのことであった。そこで練習方法の再提示を行った。従来の指導法により、付点 4 分音符への理解を深めるように試みた。また、1 小節目は拍頭が分かりやすく書かれており、1 小節目と 2~3 小節目が同じリズムであることも伝えた。しかしながら、両手にしてみるとうまくいかないため、「右手を弾く＋左手はピアノを弾かずリズムをひざ打ちする」という練習方法を再提案した。その際、左手のひざのリズム打ちはなるべく力を抜いて行うこと、この練習方法を毎日 5 分間落ち着いて行うように伝えた。そして、この練習がスムーズに行えるようになったら、楽譜通りに両手で弾いてみるよう伝えた。

4. 調査方法

筆者がバイエル 48 番について練習方法を提案し、実践してもらった 1 週間後に、演奏聴取と半構造化インタビューを行い、練習方法の有用性を考察した。学生 B については、1 週間後の演奏聴取の際に、ほとんど練習してこなかったことが判明したため、もう一度筆者が練習方法の再提案をし、実践してもらった 1 週間後に演奏聴取と半構造化インタビューを行い、練習方法の有用性を考察した。

演奏聴取と半構造化インタビューは、「音楽基礎Ⅱ」授業内のピアノレッスン時に音楽室において実施した。音楽室では、グランドピアノに講師 1 名、アップライトピアノに講師 1 名、2 つのグループに分かれてピアノレッスンを行っている。レッスンの順番を待っている学生らは、音楽室併設のピアノ練習室で練習しているか、音楽室内のキーボードで音を確認している。

学生 A については、筆者担当のグランドピアノ側で演奏聴取をし、その場で半構造化インタビューを行った。所要時間は約 4 分であった。学生 B についても、筆者担当のグランドピアノ側で演奏聴取をし、その場で半構造化インタビューを行った。所要時間は約 4 分であった。

なお、学生 B については、前述したように、練習方法を提示した 1 週間後に、ほとんど練習してこなかったことが判明したため、再度練習方法を提案し実践してもらった 1 週間後の演奏をビデオで録画し、後日評価を行った。評価者は筆者を含めた 3 名であった。評価者は、全員が音楽大学を卒業し、音楽にかかわる職業に就いている。

IV. 結果と考察

1 週間後の演奏聴取において、学生 2 名ともがバイエル 48 番を楽譜通りの正しいリズムで弾くことができるようになった。2 拍目の左手と右手のズレに問題を抱えていたが、音楽の流れも自然で、入学時点においてピアノ未経験者であったことを考えれば、十分に合格点をつけられる演奏であった。学生 B については演奏聴取のビデオから後日評価を行った。筆者を含めた 3 名で評価を行ったが、3 名とも保育者養成校の学生の演奏として、「合格」の評価であった。

1. 学生 A について

半構造化インタビューにおいて、学生 A は練習時間について、「毎日大体 20 分練習を行って、そのうち 15 分位 48 番の練習をした」とのことであった。練習方法については、「教えてもらった練習方法をやってみて、2 日目位からだんだん力が抜けて楽に弾けるようになりました」とのことであった。1 週間バイエル 48 番を練習してみてどうだったかについては、「付点 4 分音符のリズムがわかった」とのことであった。

また、学生 A はバイエル 48 番に限らず、ピアノを弾くときに力が入ってしまう傾向があったのであるが、今回の演奏聴取においては、やや力が抜けて弾くことができているように感じた。

2. 学生 B について

半構造化インタビューにおいて、学生 B は練習時間について、「今週はバイエル 48 番だけを集中的に行った。1 日だいたい 10 分位」とのことであった。練習方法については、「ミミレド、ミミレドを弾いて、それにひざ打ちをつけた」とのことであった。その練習ができてから、筆者が提案した練習方法も試してみたとのことである。1 週間バイエル 48 番を練習してみてどうだったかについては、「いや、もう、前はテンパっちゃっていて全然・・・何やっていいかわかんなくなっちゃって・・・落ち着いたら弾けるようになった」とのことであった。

学生 B は、ピアノレッスン時に、右手のみ 1 小節目のパターンでタイを取って 3 小節目まで弾いた経験を、学生 B 自身が取り入れて再確認をしていた。そして、筆者が提案した練習方法を試す前段階として、「右手を 1 小節目のパターンでタイを取って演奏+左手はピアノを弾かずにリズムをひざ打ちする」という練習を行っていた。学生 B にとって、必要感のある練習だったのであろう。その練習方法を学生 B 自身が自ら考え、判断して行ったことは、「主体的・対話的で深い学び」¹²⁾であったといえるのではないだろうか。対話的な学びとは、中央教育審議会（2016）によると、「身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる」とあるが¹³⁾、学生 B の「対話」とは、音楽や自分との「対話」であったと考えられる。

3. バイエル 48 番における学びとその拡がり

今回、学生 2 名の演奏とインタビューから、筆者が提案した練習方法は、3 拍子の中に付点のリズムを自然に演奏できるようにするという点において、一定の効果があったと考えられた。拍子感の獲得について、三輪（2017）は、「身体的な動きを伴った方法が望ましい」と指摘している¹⁴⁾。また、リズムの指導について、呉（1987）は、正しいリズムを感覚と身体に覚えこませることが重要であると指摘している¹⁵⁾。筆者が提案した練習方法は、音価を頭で理解するだけではなく、身体で体感する試みであったと考える。学生 A は、練習方法を取り入れたことにより、だんだん力が抜けて楽に弾けるようになった。また 2 名とも、「左手のリズム＝拍」を打つことにより、演奏において拍節感が感じられるようになったと考えられた。そして、拍節感を感じながら、3 拍子の中に付点のリズムを自然に演奏できるようになったと考えられた。音価を頭で理解するだけではなく、身体で体感する試みは、左手と右手のズレに困難さを感じる学生に対し、他の楽曲においても効果を発揮する可能性があると考えられる。

本学科では、入学時においてピアノ未経験の者は、バイエル 29 番からスタートしている。29 番→30 番→31 番→45 番→47 番→48 番と進むのであるが、48 番が初めての 3 拍子の楽曲である。過去のピアノレッスンノートから、48 番で初めてピアノにおいて 3 拍子の経験+付点四分音符の経験をする学生が多いと考えられる。小泉（1986）は、「日本には、二本の足に常に、または交互に均等の重心がかかる安定した二拍子系のリズムしかなく、三拍子系のリズムが発達しませんでした」と指摘している¹⁶⁾。日本人のリズム感が感覚的に 2 拍子系であることを念頭に置く必要があると考えられる。バイエルにおいて、29 番より前に遡ると 3 拍子の楽曲は 6 曲ある。また、29 番以降 48 番までの間に 3 拍子の楽曲は 5 曲ある。32 番、33 番、34 番、42 番はユニゾンで演奏する楽曲なので省き、新たに 37 番を課題に入れ、3 拍子の楽曲をピアノで演奏する経験としてもよいかもしれない。

生活のうたの「おはよう」（増子とし作詞、本多鉄磨作曲）の中には、付点音符タッカのリズムが出てくるが、1 拍の中に付点 8 分音符と 16 分音符のリズムがあるため、ここではふれない。しかし、「おかえりのうた」（天野蝶作詞、一宮道子作曲）の簡易伴奏 7,8 小節目においては、4 拍子ではあるが、48 番のように左手の 4 分音符のリズムの上に右手の付点 4 分音符+8 分音符が入ってくる（図 3）。入学時においてピアノ未経験者であった学生は、「おはよう」や「おかえりのうた」は簡易伴奏で取り組むことがある。バイエル 48 番において、付点音符を経験し、弾けるようにしておくことは、「おかえりのうた（簡易伴奏）」においてのスムーズな楽曲理解へつながると考えられる。

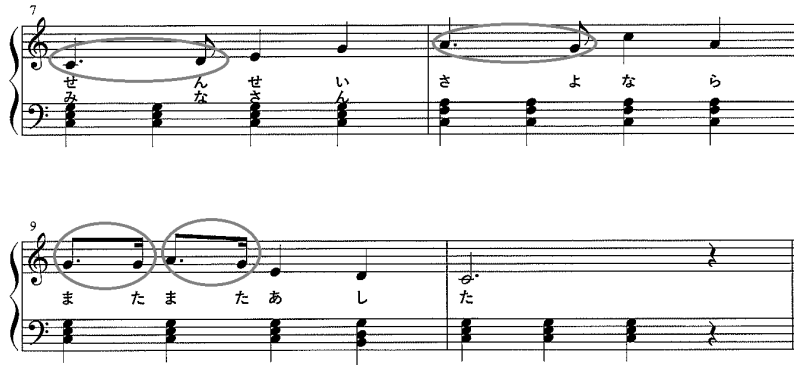


図3 おかえりのうた（簡易伴奏）7～10小節目

楽譜作成ソフトウェア「Finale2014」を用いて筆者が作成

なお、「おかえりのうた（本伴奏）」¹⁷⁾においては、後半部分の伴奏はアルベルティ・バスとなっている。7,8小節目の右手の付点4分音符+8分音符は、左手の8分音符に合わせて弾けば問題はないと考えられる。しかし、今度は9小節目の問題が出てくる。簡易伴奏では左手の4分音符の刻みを1拍ととらえ、その中で付点8分音符+16分音符を弾けばよかったのであるが（図3）、本伴奏では左手は8分音符のアルベルティ・バスとなっており、ここに付点8分音符+16分音符を入れる必要がある。ここでも左手と右手のズレが起こっており、学生がつまずきやすい箇所となっている（図4）。

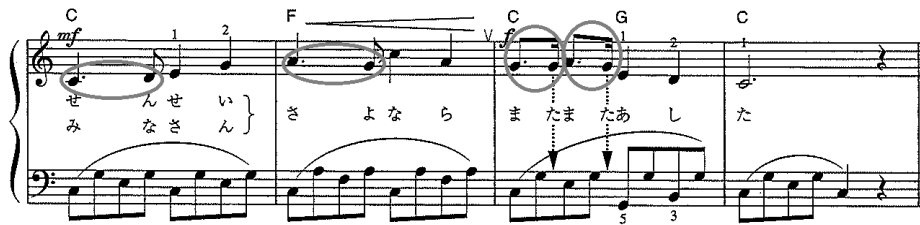


図4 おかえりのうた（本伴奏）7～10小節目

出典：『保育園・幼稚園の実習完全マニュアル』成美堂出版 p.154

バイエル48番と同様に、「おかえりのうた（本伴奏）」の9小節目においても、左手と右手のズレに困難さを感じる学生について、「右手を弾く+左手はピアノを弾かずにリズムをひざ打ちする」という練習方法をゆっくり行ってみることは、音価を頭で理解するだけではなく、身体で体感するという点において効果があるのではないかと考える。

また、3拍子で付点4分音符+8分音符が出てくる曲として、「ぞうさん」（まどみちお作詞、團伊玖磨作曲）¹⁸⁾が挙げられる。以下に「ぞうさん」の冒頭8小節目を示す（図5）。バイエル48番とリズムが同じであることがわかる。5小節目のピアノ伴奏は4分音符に付点がないが、おそら

くミスプリントであろう。

杉山（2013）は、子どものうたの分析から、子どものうたの9割は2拍子か4拍子でできていることを明らかにしている¹⁹⁾。子どものうたに3拍子の曲が少ないとはいえ、「ぞうさん」は有名な曲であり、子どもにとって親しみをもちやすい曲である。したがって、バイエル48番において、3拍子の中に付点のリズムを自然に演奏する経験を積んでおくことは意義があると考えられる。



図5 ぞうさん 出典：小林美実編 『子どものうた200』チャイルド本社 p.145

4. 今後の課題

多くの学生は、ピアノの前に座ってしまうと、とにかく音符に意識がいってしまい、「弾かなければ」となりがちな傾向にある。これはピアノ初心者においてよくみられる。すぐに音符を意識するのはではなく、楽譜の左側には重要な楽曲の手がかりがあること（調や拍子について）を、まずは確認したい。もちろん、音符と休符の種類や長さについても学んでいる。そして、片手及び両手によるリズム打ちも行っている。しかしながら、その学びをピアノ演奏に活かすことができないケースがしばしば見受けられる。机上の学習（理論）とピアノの学習（実践）のつながりにくさが問題に挙げられる。リズムの読譜について、呉（1987）は、リズムをパターンとして捉えることの重要性を指摘している²⁰⁾。1拍ずつのリズムが読めるようになったら、1小節のパターンとして捉えられるようにすることを意識していく必要がある。

また、ピアノから離れ、ピアノと違う楽器で付点音符を理解し、体感するために、アンサンブルを試みる方法も考えられる。例えば、今回のバイエル48番であれば、右手部分を鍵盤ハーモニカ、左手部分を打楽器にして、2人でアンサンブルを行う。ピアノの前に座ってしまうと、緊張に支配されてしまうケースはよく見受けられる。ピアノから一度離れ、リラックスした状態で行うアンサンブルは効果があると考えられる。

黒田（2018）は、付点リズムや音価・拍・拍子について、「手拍子が正しくできるようになっ

てからピアノで行わせる方が良い」と指摘している²¹⁾。今回の練習方法で提示したように、すぐに両手で弾こうとするのではなく、右手はピアノを弾き、左手はリズム打ちをする練習方法は、リズムや拍を感じる事が苦手な学生に対して有用性があると考えられた。また、呉(1981)は、ピアノで曲を弾くときにもソルフェージュの勉強法を活用するやり方について、効果的であると述べている²²⁾。ソルフェージュの時間においては、片手及び両手によるリズム打ちや、音楽に合わせて手をたたく活動を取り入れつつ、ピアノの前に座ってからも、ソルフェージュの練習を行い、演奏につなげていきたい。バイエル 48 番においては、ピアノ譜からソルフェージュ的課題をつくりやすかった。他の楽曲(バイエルや子どものうた)においても、どのように理論と実践をつなげていくのかを考えていくことが今後の課題である。

保育者養成校のソルフェージュについて、高崎(2016)は、リズム学習に重点を置きつつ、学習者の状況やレベルを把握せずに進めると、苦手意識を植え付けることにもなり兼ねないと指摘している²³⁾。限られた時間の中で、学生一人ひとりの学習状況の把握を手がかりとした授業計画が大切であるとする。学生が主体的に学びたくなるよう、音楽が楽しいと思えるような経験やわかる喜び・弾ける喜びを実感できるような授業を考えていきたい。

付記：

本研究の一部は日本音楽教育学会第 50 回東京大会で行った研究発表をもとに、加筆・修正したものである。

【参考文献】

- (1) フェルディナント・バイエル(1955)『標準バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社
- (2) 柏瀬愛子・牛田幸子(1986)「ピアノ教則本「バイエル」について—分析と活用—」『名古屋女子大学紀要』第 32 号 pp.217-229
- (3) 宮脇長谷子(2001)「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』第 15-w 号 pp.1-11
- (4) 小倉隆一郎(2013)「幼児教育および小学校教員養成課程におけるピアノ基礎技能テストの考察」『文教大学教育学部紀要』第 47 号 pp.23-32
- (5) 辻浩美・鹿戸一範・田中麻衣(2017)「ピアノ初学者のための使用テキストの実態と傾向—全国の幼稚園教諭・保育士養成校のシラバスに基づいて—」『小池学園研究紀要』第 15 号 pp.29-39
- (6) 井上裕子(2013)「バイエルの研究—日本におけるバイエルの受容と課題について—」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第 47 号 pp.73-81
- (7) 安田寛(2016)『バイエルの謎—日本文化になったピアノ教則本—』新潮社
- (8) 「2019 年度名古屋経営短期大学シラバス」
http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2019_51330101.html (2019 年 11 月 17 日閲覧)
- (9) 黒田紀子(2018)「幼児教育の充実のための音楽表現力向上を目指して—「バイエルピアノ教則本第 104 番」を例としたピアノ指導法—」『小池学園研究紀要』第 16 巻 pp.123-130
- (10) 阪田順子(2018)「保育者養成におけるピアノ指導法の提案—バイエル 98 番のリズム・モチーフに身

近な発音‘アマナットー’を当てはめる習得法の試み―』『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第 50 号 pp.35-42

- (11) 大石綾子・渡邊愛里・木住野睦子 (2018) 「保育者養成校における 1 年目のピアノ授業での指導法について―ソルフェージュのクラス授業における 1 つの試み―」『秋草学園短期大学紀要』第 35 号 pp.129-138
- (12) 文部科学省 (2017) 『新しい学習指導要領の考え方―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ―』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
(2019 年 11 月 17 日閲覧)
- (13) 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2019 年 11 月 17 日閲覧)
- (14) 三輪真理 (2017) 「脳科学と教育法から考えるピアノ練習法」『仁愛女子短期大学研究紀要』第 50 号 pp.133-138
- (15) 呉暁 (1987) 『ソルフェージュからピアノへ―4・5 歳児のピアノ指導―』音楽之友社 p.27
- (16) 小泉文夫 (1986) 『子どもの遊びとうた―わらべうたは生きている―』草思社 p.113
- (17) 林幸範・石橋裕子 (2006) 『保育園・幼稚園の実習完全マニュアル』成美堂出版 p.154
- (18) 小林美実 (1975) 『こどものうた 200』チャイルド本社 p.145
- (19) 杉山祐子 (2013) 「ピアノ初心者のための読譜力評価尺度作成の試み」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 24 号 pp.11-20
- (20) 前掲 呉暁『ソルフェージュからピアノへ―4・5 歳児のピアノ指導―』音楽之友社 pp.26-27
- (21) 黒田紀子 (2018) 「保育者養成校におけるピアノ指導―音楽表現力の基礎を育成するための効率的ピアノ指導法―」『小池学園研究紀要』第 16 巻 pp.113-122
- (22) 呉暁 (1981) 『ピアノの上達はソルフェージュから』音楽之友社 p.15
- (23) 高崎展好 (2016) 「保育者養成における音楽表現のためのリズム・ソルフェージュ指導法」『環太平洋大学研究紀要』第 10 号 pp.33-40

南谷 悠子(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)

